

鳩山政権の前に、大部分は前政権が残した課題でもありますが、日航問題、日米問題、来年度予算編成、新型インフルエンザ・ワクチン接種など、様々な課題が山積しています。

その中で、特に、今、国民の注目は、公開で行なわれている事業仕分けに向けられています。マスコミの中には、無責任にも、その様子を、独立行政法人に対する魔女狩りとか、1時間の討論では判断を下せるものではないなどと、批判というよりは、茶化すような報道も見受けられます。

では、今まではどうだったのでしょうか。見えないところで、数分間で何億、何百億、否、何兆円の無駄な予算が作られ、それに群がり甘い汁を吸っていた者達がいたような推測が、この事業仕分けで国民の前に曝らされたような気がします。

末弘厳太郎のエッセイに「役人学三則」(『改造』昭和六年八月号)というものがあります。内容は、

「××君 いよいよお役所勤めをされるようになったそうでまことに結構です。ご両親もさだめしお喜びのことと思います。ところでお手紙によると、役人として必要な心得をきかせろというご注文ですが、不幸にしていわゆる役人生活の経験をもたない私には、とうてい官海游泳術その他手近にお役に立つようなことを申し上げる資格がありませんから、ただ平素外部から役人諸君に接触して感じた事柄をまとめてご参考のためお耳に入りたいと思います。もちろん申し上げたいことは軽重いろいろあるのですが、便宜上次の三ヶ条にまとめた上、その後に注釈めいたことを書きます。いかにも大学の法律先生らしいな、と笑ってはいけません。

第一条 およそ役人たらんとする者は、万事につきなるべく広くかつ浅き理解を得ることに努むべく、狭隘なる特殊の事柄に特別の興味をいだきてこれに注意を集中するがごときことなきを要す。

第二条 およそ役人たらんとする者は法規を楯にとりて形式的理屈をいう技術を習得することを要す。

第三条 およそ役人たらんとする者は平素より縄張り根性の涵養に努むることを要す。」
という官海游泳術三ヶ条を述べたものです。

しかし、一方で、

「純真な若い役人としての君に、こんな暗い話をするのは実に不愉快ではある。しかし君も必ずや出世の希望に燃えているのだろう。ことに君の両親は君の出世の一日も早かれと神かけて祈っているに違いない。それを思うと、不愉快であるが、やはり以上のことをお耳に入れざるをえない。

実をいうと、今の××が君らに対して君らが期待するような光栄ある将来を約束しているかどうかについて、私は深い疑いをもっている。職工が特殊の技術を体得すべく努力す

るように、君らもおのこの得意とするところに精力を集中して、よい行政的職工になるように努力するほうがいいのかも。そうして君らがその気になって出世を断念しさえすれば、君らの生活は今日からでももっと明るいものになるのかも。ただ私は、今ここにこの点について、はっきりしたことを君にいいないのをまことに遺憾とする。」と結んでいます。まさに、現在の官僚の皆さんが忘れてきたものではないでしょうか。

今でも、官僚は、純真な若い役人として入省し、国民のために、おのこの得意とするところに精力を集中して、よい行政を行うように努力してきた方々が大部分であったと推測します。しかし、何時の間にか、国民の税金を自分のものと錯覚し、国民の為に使うことを忘れていたことも、今回の事業仕分けで明白な事実として、国民の前に曝されたことも事実です。特に、独立行政法人の事業説明において、既得権益を守ろうとしている姿、テレビが意図的（魔女狩りの）に放映したのだと思いますが、国民には醜い姿、こんな所にこんな無駄がとの印象は拭えません。

今回の事業仕分け、確かに仕分け対象の事業項目が適当であり、検討時間が十分であったとは思いますが、国の予算編成の内容が幾らかでも国民の前に公開されたことは、政権が交代したことによる効果であったことは事実です。

本来、概算要求は8月初頭。来年以降の事業仕分けは、十分準備時間も取れるはず。今年より来年、更に、再来年と充実したものになっていくことを願って止みません。



日経：「基金・積立金など「返納」判定相次ぐ 事業仕分け」(11/13)

政府の行政刷新会議（議長・鳩山由紀夫首相）の作業グループは12日、2010年度予算の概算要求の無駄を洗い出す「事業仕分け」を続行し、24項目、67事業について議論した。国が財源を拠出する財団法人などの基金や、特別会計の積立金などを全額、国庫に返納するよう求める判定が相次いだ。返納を求めた基金や積立金の08年度末の残高を単純に合計すると約7000億円になった。

基金を解散するなどして国庫に返納すれば、一般会計の税外収入などになる。過去最大の約95兆円に膨らんだ10年度予算の概算要求を削るだけでは財源確保は苦しいため、いわゆる霞が関の「埋蔵金」の活用を狙った格好だ。



<http://www.cao.go.jp/sasshin/index.html>

< 末弘厳太郎 (1888-1951) >

法学者。東京大学名誉教授。研究対象は、民法、労働法、法社会学。山口県に生まれ。東京帝国大学法科大学独法科卒業。東京帝国大学法学部教授。



労働法学の創始者にして法社会学の先駆とされ、軽妙な語り口で書かれた『民法雑記帳』、『嘘の効用』等は法律専門家ではない一般人にもよく読まれた。

第二次世界大戦後、東大を退職して GHQ のもとで労働三法の制定に尽力。また、日本水泳連盟（当時は大日本水上競技連盟）の発足に尽力、会長にも就任、水泳選手のために「練習 10 則」を制定。

『日本労働組合運動史』で毎日出版文化賞受賞。その他、『債権各論』『物権法上巻』『農村法律問題』『法窓閑話』『債権総論』『民法雑記帳上下巻』『法学入門』など。

春秋：「空の歴史」(11/13)

東京・代々木公園の片隅に、「日本航空發始(はっし)之地」と刻まれた碑が建っている。ライト兄弟が初めて空を飛んでから7年後の1910年。この地で徳川好敏、日野熊蔵という陸軍大尉が、同じ日にそろって、日本での初飛行に成功した。

徳川大尉が3000メートルを飛行すると、日野大尉も1000メートルを飛んでみせた。2人は操縦の技を競うライバルだった。徳川大尉はフランスに留学し、主翼が上下2枚の飛行機を買った。日野大尉はドイツで学び、主翼1枚の機体で対抗した。2人の競争がなかったら日本初飛行の実現はもっと遅れたかもしれない。

日本の空の歴史をきり開いた2人が存命だったら、日本航空はどう映るだろうか。航空業界は長らく企業を保護する行政が続き、運賃は値下げせずに済み、新たな参入も少なく大手の寡占状態が続いた。日本航空の経営悪化の根っこは政府の過保護のもと、競争を避けてきたことだと2人は喝破するのではないか。

2人のうち日野大尉は初飛行後、不遇だった。飛行機の技術の研究に打ち込みすぎて軍のなかでうとまれ、閑職に追いやられた。それでも、初飛行で使った外国製の機体にあきたらず自作機を設計し、航空技術の歴史に名を残した。日本航空も政府の支援を受けるだけでなく、自力で苦境をはね返す気概がほしい。

<徳川好敏(1884-1963)>

陸軍中将。清水徳川家当主。日本陸軍の航空分野を主導。東京府生まれ。陸軍士官学校卒業。陸軍航空学校教官、航空兵団司令官。

飛行機操縦技術を習得するためにフランスへ派遣され、帰国後の1910年(明治43年)12月19日午前、軍公式の飛行試験で、日本国内で初めて飛行機(アンリ・ファルマン式複葉機)により空を飛ぶ。翌年、飛行機からの空中写真撮影に成功。

航空兵団が編制されると兵団長に就任、支那事変勃発すると、臨時航空兵団司令官として北支に出征、終戦時には陸軍航空士官学校長となる。



<日野熊蔵(1878-1946)>

陸軍歩兵中佐。日本航空界黎明期のパイロット。熊本県球磨郡人吉町(現・人吉市)出身。陸軍士官学校卒業。

ドイツに派遣され操縦技術を学びグラデー単葉機を購入、1910年(明治43年)12月14日、代々木錬兵場(現・代々木公園)において滑走試験中に60メートル程度の飛行に成功、これが日本最初の動力機の飛行であった。

しかし、軍は「滑走試験中に偶然飛んでしまったので飛行ではない」と無視、翌15日の飛行公開試験では、徳川が飛行に失敗したのに対し日野は成功、さらに16日にも単独飛行に成功したが、双方とも認められなかった。



19 日になって日野・徳川の両方が成功し、これが初めて動力機初飛行として公式に認められた。これは、徳川家の血筋である好敏に「日本初飛行」の栄誉を与えたいという軍の意向だったといわれている。しかし、日野の飛行が成功した時真っ先に駆け寄って喜んだのは他ならぬ徳川大尉であった。

1911 年（明治 44 年）から翌年にかけて自身が設計の機体、日野式飛行機を製作した。



徳川中将



日野中佐

天声人語：「日米とも新政権」(11/11)

沖縄県石川市（現うるま市）は、沖縄戦後の日本人収容所から発した街だった。ある日収容者の前に男が現れ、「残った者が元気でないと死んだ人が浮かばれぬ。命（ヌチ）のお祝いをしよう」と踊り始めた逸話が残る。『沖縄言葉（ウチナーグチ）ちょっといい話』（藤木勇人著、双葉社）で知った。

だが、命のリレーはままならず、彼らの子どもらを再び悲劇が襲う。市立宮森小に米戦闘機が落ち、児童11人を含む17人が死亡、200人超が負傷して50年になる。

2年生だった校長の平良（たいら）嘉男さん（58）は節目の今年、遺品などを集めた巡回展を始めた。「生活に追われ基地に耐えることが日常になっていないかと、県民に問いたい」と語る。

戦争で踏みにじられた後も、この島は異国の戦に酷使されてきた。いや、基地は日本の平和のためだという反論があろう。しかし、度重なる墜落事故や性犯罪で流された血涙は、同盟のコストといった乾いた言葉ではくくれない。

普天間飛行場の問題も積年の我慢と怒りの先にある。県外移設を訴えて政権を取った鳩山首相に、地元の期待が膨らむのは当然だ。平良さんも、県内移設に反対する大会に出た。「県外だ国外だ、と言うのはつらいのです。この苦しみを誰かに強いることになる」。

ベルリンの壁が崩れて20年というのに、極東では冷戦が尾を引き、沖縄の「役割」もなかなか終わらない。とはいえ、外国の基地がいくつもあるのは、主権国家として異常な姿であろう。日米ともせっかくの新政権である。この際、お互い腰を据えて同盟の明日を考えたい。

< 藤木勇人 (1961-) >

うちな～嘶家。沖縄コザ市生まれ。

郵便局員時代、笑築過激団に入団、次いで「りんけんバンド」に参加、全国各地はもとより、海外公演までこなし、日本一多忙な郵便局員生活を送る。



りんけんバンド脱退後、「うちな～妄想見聞録」と銘打って、沖縄をメインに自作自演の一人芝居の舞台を展開、那覇・コザの定期公演他、東京下北沢で年2回の定期公演や、沖縄でのラジオ、テレビ、CMで活躍、2001年には、NHK朝の連続テレビ小説「ちゅらさん」で、東京の沖縄料理店「ゆがふ」店長役で出演。

その他、『島』をテーマとした講演会、現代版紙芝居「新・沖縄むかし話」のボランティア公演など幅広い活動を展開中。

編集手帳：「事業仕分け」(11/13)

無意識に、人は演技をする。ドラマなどで見た誰かの役を演じてしまう。カメラの前では、なおさらだろう。悲しみの際はケネディ家の例から学んだしきたりに従い、勝利の表現にはテレビで見た運動選手のゼスチャーをまねる。

スコット・トゥロー「推定無罪」(文春文庫)の一節だが、「仕分け人」なる人たちはどうだろう。つい、犯人の嘘(うそ)を突き崩す取り調べの刑事役を演じてしまった人もいるかも知れない。

国会議員や民間人などからなる「仕分け人」が各府省の担当者と公開の場で議論し、事業の要不要をその場で決めていく。政府の行政刷新会議による無駄の洗い出し作業「事業仕分け」が佳境に入った。

問答無用とばかりに仕分け人が発言を遮ったり、耳を傾けていい意見に取り合わなかったり、「いじめを見ているようで、つらい」という識者の声も聞かれる。斬新で有意義な作業なのに、相手を嘘つきの悪玉と決めてかかり、“やりこめてナンボ”の正義の味方役を演じてしまえば、仕分けの目が曇るだろう。

本来、ドラマには不向きな、地味で複雑で専門的な作業である。芸達者は要らない。

<スコット・トゥロー(1949-)>

リーガルサスペンス(リーガルスリラー)小説家、ノンフィクション作家。現役の弁護士。米国シカゴ生まれ。死刑廃止論者。アマーフト大学卒業後、スタンフォード大学大学院で学びジュリス・ドクター(法学博士)を取得、大学院中に『ハーヴァード・ロー・スクール わが試練の一年』を出版。



シカゴ地区連邦検察局に検事補として就職、在職中に執筆した『推定無罪』がベストセラーとなったのを期に、1986年退職、作家活動を開始。

2002年、イリノイ州知事ジョージ・ライアンから死刑諮問委員に任命され、報告書(答申)を起草、ライアン知事の死刑囚全員減刑、死刑制度一時停止宣言に貢献。

その他、『立証責任』『有罪答弁』『われらが父たちの掟』『囹圄弁護士』『死刑判決』『極刑 死刑をめぐる一法律家の思索』など。

余禄：「ワクチン接種」(11/11)

「瘡（おこり）」というから今でいうマラリアだろう。江戸の幕臣の家ではその霊薬として珍重されたものがあるという。「日光御鑑餅糰（おかがみもちほしい）」「伊勢御供」「禁裏玄猪（きんりいのこ）餅糰」 - つまり日光の霊廟（れいびょう）や伊勢神宮、京の宮中で供えられていた餅や糰のお下がりがだ。

氏家幹人さんの「江戸の病」（講談社）によれば、日光や京都の在勤者が持ち帰って秘蔵していたのだ。それを知人からもらって治ったとの記録もある一方、当然ながら服用しても効果なく、結局は特效薬のキニーネで治したとの話もある。

キニーネがあるなら、なぜ干からびた餅を……と思うのは現代人だ。先の記録には、はしかよけのまじないに馬の足を洗う桶（おけ）を娘にかぶらせ、その桶を他家にも貸したという話もあった。秘蔵の霊薬も、まじないの道具も、同僚や知人同士で融通し合い、病と闘った江戸人だった。

むろん現代でも薬のやりくりに困ることがある。小児の重症化が目立ってきた新型インフルエンザに対し、厚生労働省は先ごろ小児のワクチン接種の前倒しを都道府県に要請した。だが今月下旬に出荷されるワクチンは予定の2割減の見通しで、接種時期の遅れが気掛かりである。

すでに始まった妊婦や基礎疾患のある人への接種も、地域によっては不足も目立つようだ。京都のある透析専門病院では550人以上の接種希望に対し府からは52人分しか配布されず、くじで接種の順番を決めるという話まで伝わってきた。

行政にはくれぐれも国民の不安やあせりに寄り添った情報提供や対策に心を砕いてもらいたい。病封じができるのなら、干からびた餅でも馬の足の洗い桶でもほしい人の気持ちに昔も今もない。

< 氏家幹人（1954-） >

歴史学者。福島県出身。東京教育大学文学部卒業。

近世に関する著書を数多く書き、人と人の絆のあり方に注目。武士の世界を取り上げることが多く、ほかに男色・姦通など性をテーマにしたものや、老い、家族に関するものも多い。



著書に、『江戸藩邸物語 戦場から街角へ』『江戸の少年』『殿様と鼠小僧 老侯・松浦静山の世界』『小石川御家人物語』『武士道とエロス』『元禄養老夜話 旗本天野弥五右衛門の晩節』など。